幻想郷征服録

桜三里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想郷征服録

【Ｎコード】
Ｎ２３０７ＢＡ

【作者名】
桜三里

【あらすじ】
博麗大結界に今日も包まれ、平和な日々を過ごす幻想郷。
しかし弱った妖怪、幻想物を回収する役目を持つ博麗大結界が引き寄せ幻想郷へと至らせた相手は、最悪の災厄だった。
黄金の英雄王ギルガメッシュ。
外の世界と結界により隔離されたその地は、世界全てを所有するギルガメッシュにとって、所有物ではない。ならば、よかろう。征服王よ、時にはこの我（オレ）も征服と戯れようではないか。

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの英雄王ギルガメッシュが幻想入りという誰得な小説です。少しでも楽しんでいただければ。

プロローグ（前書き）

東方モノを書くのは初めてです。感想などお待ちしております

プロローグ

その男は王であり　あらゆる者も　あらゆる鎖も

Der Mann ist King, wie f?r jede Person wie f?r jede Kette

あらゆる総てを持ってしても繋ぎ止めることが出来ない

Ich kann es nicht damit binden, auch wenn ich es damit mache, jedes alles

彼は縛鎖を千切り　枷を壊し　哄笑する世界で唯一の王

Ein K?nig nur in der Welt, von der er rei?t, und bricht gyve und Lachen

この世のありとあらゆるモノ総て　彼を抑える力を持たない

Ich habe keine Macht, ihn von der Welt all jeden Sachen in Schach zu halten

ゆえ　神は問われた　貴様は何者か

Dann fragte ihn Jesus. Was ist Ihr Name?

愚問なり　無知蒙昧　知らぬならば答えよう

Es ist eine dumme Frage. Ich antworte.

我が名は――ギルガメッシュ

Mein Name ist – girugamesh

プロローグ（後書き）

元ネタはＤｉｅｓ　ｉｒｅのラインハルト・ハイドリヒの詠唱、『レギオン』です。

01

Ｓｉｄｅ　ルーミア

人食いの少女は、眼下に広がる霧の湖を見下ろしながら、いつも通り気侭に宵闇の中を舞っていた。

この湖は、昼間になると深い霧で覆われる。そして夜になれば霧が晴れ、また朝になれば霧が発生する、という奇妙な性質を持っている。それが何故なのかは知らないし、興味もない。彼女にとってはただ夜の散策で通り過ぎるだけの場所であり、別段興味の対象にはならなかった。

ルーミアは、この時間が好きだった。

闇を朋友とする彼女にとって、太陽の光は大敵である。一日の活動時間を終えて西へと沈んだ太陽と共に、少女の気安い時間が訪れるのだ。わざわざ自分の周囲に闇を発生させずとも、当然のように闇に覆われた空。星々の瞬きこそ存在するものの、その程度の薄い光はルーミアにとって、闇と変わらない居心地である。

この時間は、彼女にとって何の憂いもなく、狩りができる時間だった。闇を恐れる人間へと夜闇に乗じて襲いかかり、その身を喰らいつくすのが彼女にとって、最高の愉悦となる時間だった。そんな風に襲った人間の数が、もうどれほどになったかは分からない。数えたこともないし、数えようとさえ思わない。例えるならば、今まで何度食事を摂ってきたのかを問われたところで、即答できる人間などいないだろう。ルーミアにとって、人間を食った回数というのは、それに似ていた。

だが同時に、ルーミアは知っている。この時間に、彼女の獲物が出歩きはしないことを。

人間は闇を恐れ、妖怪を恐れる。昼が人間の時間ならば、夜は妖怪の時間だ。それを知っている人間は、夜になれば人間の里で眠りに入っている。妖怪であるルーミアは、人間の里に入ることはできないのだ。領域を侵した時に、動く輩のことを考えれば、至極当然な考えですらある。

例えば――人里の守護者と不死鳥の少女。

例えば――博麗の巫女と黒白の魔法使い。

例えば――妖怪の賢者と九尾の狐。

人里へと侵入した時点で、これだけの大物を敵に回すこととなる。それはルーミアのみならず、妖怪にとっては忌避すべき対象だ。間違いなく、殺されるのは自分であると分かるのだから。

だからこそ、ルーミアにとっての獲物は、危険を承知で里の外を出歩く人里の人間か、もしくは、そんな常識さえ知らない外来人か、その程度に限られる。

とはいえ、人里の人間などほとんど出歩きはしないし、もし存在したとしても、大抵は彼女以外の妖怪にとって食われる。この辺りの妖怪は、どいつもこいつも食欲旺盛だ。そんな中でルーミアが先に発見することなど、それこそ稀、というものだ。

だからこそ、ルーミアは別段、狩りの成果を期待して飛んでいたわ

けではない。どうせ獲物は見つからないのだから、夜の散歩程度の気安さで飛んでいただけだ。

誰か友達でも見つかれば、適当に雑談にでも興じよう。この時間ならば、蛍の妖怪か夜雀あたりが暇をしているかもしれない。彼女らの根城は、確か竹林あたりだったかな、と適当に向かう場所を決めようとして。

それを。

見つけた。

霧の湖から紅魔館へ続く森。吸血鬼の住まう紅魔館の威光か、その森に住まう者は皆無と言っていい。ルーミアと同じ、人食いの妖怪でさえ住まうことは稀だ。

理由はただ一つ。

吸血鬼の根城近くを人間が通ることなど、皆無であるからだ。

だがルーミアは、見つけてしまった。目を向けてしまった。霧の湖と紅魔館に挟まれた森の、ほぼ中央。

――闇。

闇を操る彼女にとって、ひどく身近な存在。人が忌み、妖が好むもの。

自然、ルーミアの向かう先はそちらへと矛先を変えていた。

まるで、この世全ての悪を内包したかのような、圧倒的な闇。

彼女は、闇を好んだ。

ルーミアの全速でもって、立ち上る闇へと向かう。強大な闇。それこそ、ルーミアの操る闇などお話にもならないほどの、絶対的な闇。

それならば――。

喰らえ。

妖怪としての本能が、ルーミアにそう告げていた。

闇の中心へと降り立つ。木々に包まれた森の、小さく拓かれた場所。樹齢が幾らかなど見当もつかない大樹に囲まれた、小さな間隙。

そこにいたのは、男だった。

星の小さな瞬きにさえ煌めく、黄金色の髪。逆立ったそれと同じ色でありながら、それ以上に激しい輝きを持つ厳かな黄金の鎧を纏っている。少なくともこの幻想郷では、あまり見かけない格好。

鋭い眼差しが、ルーミアを見据えた。

「……消えよ」

重く響く、低い声音。その言葉に込められているのは、圧倒的な威圧感。

殺気すら込められた言葉に、ルーミアは息を呑む。

「我(オレ)は些か機嫌が悪い。その命を散らせたくなくば、疾く消えよ」

これは――王だ。

決定的に存在の次元が違う、絶対的に存在している、王だ。

そう、本能で、理解した。

ごくり、と唾を飲み込む。畏怖すると同時に。恐怖すると同時に。
それは甘美な果実を目の前にしたような感覚でもあった。
ただそこに存在しているだけで、漏れ出る圧倒的な闇。
だからこそ、ルーミアの言葉は、発せられた。

「あなたは、食べてもいい人間？」

いつだって、獲物を目の前にすれば告げた言葉。それに対する答えが何であれ、食うことには変わりないのだけれど。通過儀礼のようなものだ。

己が人食いの妖怪であると誇示し。

相手がこれより食われる運命を暗喩する。

いつだってルーミアにとっての獲物は、この言葉と共に恐怖した。
あの博麗の巫女と黒白の魔法使いを除いて、誰もが死に恐怖した。

「……ほう」

だが目の前の男は、そう静かに微笑むだけだった。

「我(オレ)に対してそのような物言いをするとは、人食いの化生は礼儀も知らぬようだな」

「れーぎ？　それって美味しいの？」

「だが、己が武に依ることでしか語る言葉を持たぬ者は、好まぬこともない」

くくく、と男が嗤う。ルーミアの頬を、一筋の汗が流れるのが分かった。

自分では、この男には絶対に勝てない。

本能がそう警鐘を鳴らす。逃げろ。そう理性が警告する。この場から離れろ。全ての感覚が、ルーミアを追い立てる。

だけれど、知ってしまったのだ。

この、強大すぎる闇を。

「貴様の武がどれほどかは知らぬが、我(オレ)が少々遊んでやるとしよう」

男が言葉と共に、立ち上がる。ゆらり、と鈍重な動き。しかし、確実に眼差しはルーミアを見据えて。

次瞬。

ルーミアは我知らず、懐からスペルカードを取り出していた。

枚数の提示、カード宣言、スペルカードルールに施されたあらゆる規律を、この場では考えない。あらゆる全ての手段を用いて、あらゆる全ての卑しさを持って、全力で挑まなければ絶対に勝てない。彼女はそう本能で理解した。

これは『弾幕ごっこ』などでは、決してない。

殺し合い、だ。

「夜符『ナイトバード』！」

スペルカードを叫ぶと共に、ルーミアの前方に弾幕が伸びる。翼のように左右へと弾幕を展開し、逃げ場を奪うスペル。煌めく紫と青の弾幕が展開されるも、目の前の男は特にどうということもなく、変わらず面倒臭そうに前髪へと手櫛を入れるだけだった。

「ふむ、さすがは童女といえ化生といったところか」

男はそう呟くと共に、右手の指を弾く。それと共に、確実に男を捉えていたはずの弾幕が。

「……え？」

捻じ曲がった。

まるで物理法則を無視しているかのように、直線で向かっていたはずの弾丸が、男へ当たることを避けるかのように、曲がってしまった。ナイトバードにそんな効果はないし、付加した記憶もない。それなのに。

「さて、どうやら後の世では『絶対不落の砦（アスピス・ヘパイトス）』などと大仰な名を付けられているらしいが、我（オレ）にとっては所有物の一つでしかない神代の盾よ。神代より伝わりし盾の前で、貴様の弾丸など塵芥にも等しいぞ、雑種」

男がその右手に携えている、小さな丸盾。まるで時代に合っていない、青銅でできたような盾。神にも等しいほどの――圧倒的な存在感を持った、大盾。

それが男の周囲に不可視の結界を張り、弾幕を全て、捻じ曲げたということ。

ルーミアは混乱した。そんな能力は、聞いたことがない。弾幕とは耐えるものでもなければ防ぐものでもなく、躱すものだ。弾くものでもなければ捻じ曲げるものでもなく、避けるものだ。

そんな常識など、一切が通じない。

「あ……あ……げ、月符『ムーンライトレイ』っ！」

ばら撒く小さな弾丸と、中央に走る光線。いくら不可視の結界といえ、威力だけならばムーンライトレイの方が高い。ルーミアはそう信じて、破壊力だけならばどのスペルにも勝る、それを放ったはずだった。

「ふむ、月光か。悪くはない。もっとも、偉大なる我（オレ）にとっては月の光すら足りぬ。我（オレ）を照らしたいと言うならば、太陽を持ってくるがいい」

だがそれでも、男はただ平然と、ただ超然と、そこに立っていた。

信じられない――その思いに、体が震える。

いつか戦った、博麗の巫女。いつか戦った、黒白の魔法使い。どちらも強かったし、ルーミアは勝つことができなかった。

だがルーミアは思う。確かに博麗の巫女も黒白の魔法使いも強い。だけれど。

この男ほどに、圧倒的な力があっただろうか。

「余興は仕舞いか？　では我(オレ)も、財を幾つか見せてやろう」

同じように、右手で、指を鳴らして。

「『王の財宝(ゲートオブバビロン)』」

男の背に、数多の神剣、聖剣、神槍、聖槍、古今東西あらゆる神話に登場する、一振りだけで世界の命運を変えてしまえるほどの幻想を持った、武器が。

一斉に、その矛先をルーミアに向けた。

02

Ｓｉｄｅ　博麗霊夢

博麗神社の夜は早い。もっとも、それに対して確たる理由があるというわけではない。

単純に今代の博麗の巫女、博麗霊夢の寝る時間が早い、というだけだ。幻想郷というのは娯楽に乏しく、頼んでもいないのに勝手に持ってくる迷惑天狗の作った新聞くらいしか暇潰しの道具はない。そして霊夢は、八割方が主観で書かれた新聞を、貴重な油を使ってランプを灯してまで読む趣味はない。

つまり、暗くなれば眠る。明るくなれば起きる。それがこの博麗神社の主、博麗霊夢の生き方だった。

そして今日も同じく、いつも通りの時間に床につき、いつも通り眠りについた、はずだったのだが。

不意に、神社の縁側の扉が開く音がした。

物盗りにしては、自分の音を隠していない。つまり、見つかったところで問題のない相手だということだ。もっとも、霊夢ならばいくら音を隠したところで、気配で察するのだから意味などないのだが。

布団に包まったままで目を開き、考える。

第一候補、黒白の魔法使い、霧雨魔理沙。

恐らくこの神社に訪れる人間で、最も頻度が高い相手だろう。厄介なトラブルメーカーであるも、どこか憎めない彼女は、何故かよくここに入り浸る。

だがそれも、時間を考えてのことだ。わざわざ霊夢が眠りについてまで、ここに入り浸るほど魔理沙は迷惑な輩ではない。もしも魔理沙だとするなら、何かの事情を抱えていると考えた方がいいだろう。

第二候補、小さな百鬼夜行、伊吹萃香。

魔理沙と同じく、この神社に入り浸る酔いどれ幼女の鬼である。いつもふらりとどこかへ出かけていって、同じくふらりとまた戻ってきては酒を飲む、という生活だ。

考えられるとすれば、ふらりと神社へ戻ってきたはいいものの、夜であるため家主である霊夢のことを考え、縁側にて一人手酌で月見酒でも楽しんでいる、といったところか。悪酔いすれば、霊夢が起こされて付き合わされる可能性もある。もっとも、あの鬼が悪酔いしている姿など見たことはないのだが。

第三候補、神隠しの主犯、スキマ妖怪、八雲紫。

幻想郷でも最古参の妖怪で、幻想郷を覆う博麗大結界の維持を行う大妖怪。その実力は幻想郷全ての実力者の中でも五指に入り、特に『境界を操る程度の能力』という反則じみた能力がそれを示してい

る。

まぁ霊夢にとっては、ただの胡散臭い妖怪に過ぎないのだが。幻想郷の危機に異変解決へと迅速に乗り出す以外は、式神に任せきりで寝てばかりのグータラ妖怪だ。もしも今訪れた相手が紫ならば、それこそ大問題が発生しているとみていいだろう。

さて、霊夢に思い浮かぶ候補は、それくらいのものだが。

願わくば、少々微睡んでいるため、寝所に入ってこない程度の用件であってほしい。

そんな願いは、叶わなかったけれど。

「……霊夢、起きなさい」

意外な人物の来訪などは当然なく、それは第三候補、八雲紫の声だった。

思い切り溜息を吐きたかったが、堪える。魔理沙の持ってくる厄介事程度ならば、まだ良かった。悪酔いした萃香が無理やり酒に誘ってくる程度ならば、まだ良かった。

この時間に、八雲紫がここを訪れる。それは、すなわち。

幻想郷の、危機を示しているのだから。

「……何よ」

起き上がる。紫はいつも通りの名前と同じラベンダーのドレスを纏い、夜だというのに日傘を片手に枕元に立っていた。体は睡眠を欲していたが、それでも紫を無視するわけにはいかない。

幻想郷の危機とすら呼べる状況に、博麗の巫女である霊夢が動かないわけにはいかないのだから。

「あんたが神社に来るなんて、珍しいわね。賽銭箱は表にあるわよ。でも参拝は、できれば昼間にしてほしいんだけど」

「……火急の用件よ」

霊夢の軽口を受け流し、紫は重々しくそう口を開く。

その表情に浮かぶのは、痛々しいほどの絶望感。幻想郷でも圧倒的な力を持つこのスキマ妖怪の、このような姿を見たことはない。

つまりそれだけ――事態は切迫しているということだ。

「博麗大結界は、外の世界で弱った妖怪を幻想郷に保護する、という目的もある……なんて、あなたは言わなくても知っているわよね？」

「……当たり前でしょ。今更、私に博麗大結界の講釈をしに来たわけ？」

「霊夢……どうやら今回、博麗大結界はとんでもない輩を引きつけてしまったみたいなのよ」

とんでもない輩――その言葉に、思わず霊夢は息を呑む。

この幻想郷に存在する実力者は、それこそ強者に満ちている。例えば目の前のスキマ妖怪であったり、冥界の死を操る亡霊であったり、紅の館に住む吸血鬼の姉妹であったり、蓬莱の姫君とその従者であったり、竹林の炎を操る不死鳥であったり、山の上の神社を司る二柱の神であったり。

地底には核熱を操る鴉も一騎当千の鬼もいる。人里には半人半獣の歴史喰らいもいる。人里近くに最近越してきた寺には、毘沙門天の使いと自称する者までいるのだ。

それだけの実力者が並んでいる幻想郷において、八雲紫が言う『とんでもない輩』。

つまり――それ以上の実力を持つ、博麗大結界の危機となりえる存在、ということ。

「……そいつ、何者よ」

「外の世界で、全てを統べていた王。あらゆる財宝は彼の所有物で、あらゆる人間は彼の支配にあった。人は彼を、こう呼んだ」

八雲紫はそこで言葉を切り、苦々しく唇を噛みながら、ゆっくりと告げた。

「英雄王――ギルガメッシュ」

02（後書き）

この物語の主人公はギルガメッシュですが、ギルガメッシュ視点にはなりません。基本的には東方キャラの視点になります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2307ba/

幻想郷征服録

2012年1月5日21時46分発行